寄稿

『ペトロ岐部と187殉教者列福式』に寄せて

宗教法人 カトリック長崎大司教区
教区本部事務局福音化推進部
秘 書 宮崎善信（みやざきよしのぶ）

1987年　長崎県立長崎東高 卒業
1991年　上智大学外国語学部英語学科 卒業
1994年　（韓国）西江大学文学部史学科 卒業（1992年に学士編入）
1996年　（韓国）高麗大学大学院 韓国史学科 修士課程単位取得
1999年　在大韓民国日本国大使館 専門調査員
2006年４月　社団法人 長崎国際観光コンベンション協会
2006年11月　宗教法人 カトリック長崎大司教区 教区本部事務局
2007年６月　『ペトロ岐部と187殉教者列福式』実行委員会 事務局（兼務）
2008年４月～現在　現職

１．はじめに

来る11月24日（月）、長崎市の長崎県営野球場にて、ローマ教皇庁が主催する『ペトロ岐部と187殉教者列福式』が、国内外から約３万人の参列者を集めて開催されます。

「列福式」とは、カトリック教会の宗教行事で、模範的な生き方をした信者を、カトリック教会が公式に「福者」の位に列する儀式です。

このたび開催される『ペトロ岐部と187殉教者列福式』（以下、『列福式』と表記）は、教皇代理としてホセ・サライヴァ・マルティンス枢機卿（ローマ教皇庁列聖省の前長官」）臨席のもと、日本のカトリック教会の司教団、司祭団による司式となります。形式は、カトリックの宗教儀式である「ミサ」を基本ベースにして、今回新たに「福者」の位に上げられる188名の殉教者の紹介や列福宣言などが盛り込まれます。

さて、『列福式』が長崎市で開催されることが決まったのは昨年９月のことでしたが、その後、新聞やテレビ等のメディアを通じて報道が行われてきたこともあって、読者のみなさまの中には耳にされた方もあると思います。

今回、これらの一連の『列福式』関連の報道に接しながら感じることは、カトリック教会関係からだけではなく、それ以外のさまざまな方面から関心が寄せられているということです。

現在、『列福式』開催まで一カ月という時点で（註：執筆時）、「参列を希望しているがなんとかならないだろうか」という問い合わせが頻繁に入ってきています。その中にはカトリックの信者ではない方も多数含まれています。

他方、この『列福式』の機会をとらえて、長崎県などが中心になって実施中の『列福式関連連携事業』がいよいよ佳境に入ってきています。

この『連携事業』は、長崎県の発意で企画され、カトリック長崎大司教区および日本二十六聖人記念館の特別協力により開催されるもので、国内外、とくにバチカン美術館と図書館、イエズス会の積極的な協力により開催される運びとなりました。また、列福される殉教者ゆかりの地など県内の九つの市町との連携による企画もあります。

現在、「長崎✦信仰の遺産～時を超えるキリシタン文化の旅～」と題して、長崎歴史文化博物館、長崎県美術館、日本二十六聖人記念館を中心に特別展が開催されています。

主な展示品としては、大村純忠のイエズス会への長崎・茂木の寄進状、天正遣欧少年使節記念メダル、西坂での元和８年の大殉教の絵、今回列福される殉教者の一人内堀作右衛門らの教皇パウロ五世に宛てた手紙（以上、長崎歴史文化博物館）、ローマのジェズ教会に保管されている、西坂での元和５年の大殉教の絵（以上、日本二十六聖人記念館）、西坂の日本二十六聖人像の作者で有名な舟越保武氏の作品群（以上、長崎県美術館）が挙げられますが、これらの中には本邦初公開の貴重なものが多数含まれています。

この『連携事業』を通じて、『列福式』に参列する方々をはじめ、多くの方々に長崎県が有する独特な歴史・文化を知っていただけたらと期待しています。

２．『列福式』の背景について

さて、さまざまなかたちで紹介されている『列福式』ですが、大多数の日本の方にとってはあまりなじみのないものだと思いますので、ここで、『列福式』が開催されることになった経緯を含め、簡単に説明したいと思います。

（１）経緯について

まず、188名の殉教者が「福者」として認められた経緯についてです。

日本カトリック司教協議会（註：日本におけるカトリック教会の最高決定機関）は、1981年に来日した前教皇ヨハネ・パウロ二世の呼びかけに応え、188名の殉教者の生涯に関する総合的な調査に着手し、その後、15年間にわたって詳細な調査報告書を作成しました。

ローマ教皇庁列聖省は1996年、その調査報告書をもとに列福のための審査を開始し、同省の歴史審査委員会や神学審査委員会などにおいて厳正な審査を行いました。その結果、2007年６月１日、教皇ベネディクト十六世は188人の列福を正式に承認しました。

次に、『列福式』の開催地が長崎となった経緯についてです。

教皇ベネディクト十六世が列福を正式に承認する１年前、『列福式』の開催決定が近いと判断した日本カトリック司教協議会は、殉教者ゆかりの地を持つ教区（註：カトリック教会における教会行政区分、日本には16の教区があり、「長崎教区」はそのうちのひとつ）

に開催地としての可能性を打診しました。長崎教区の顧問団は、「今回の福者は188名にのぼり、したがってゆかりの殉教地も全国に広がっているので、長崎以外の地で開催されることが望ましい。ただし、長崎に要請があれば受ける用意はある」旨、答えました。結局、東京教区をはじめ種々の事情で開催候補地を名乗る教区はなく、長崎が選定される結果になりました。

（2）日本ゆかりの聖人・福者

今回新たに福者と認められた188名のほかに、日本からは多くの聖人や福者が誕生しています。

ちなみに、「福者」は「聖人」の前段階で、

日本26聖人殉教地（長崎市）

放虎原殉教地記念碑（大村市）
日本205福者の中には、この地で殉教した者も含まれている。

さらに調査研究を進め、最終的にローマ教皇が認めると「聖人」となります。そして、「聖人」の位に列する儀式を「列聖式」と呼びます。

日本ゆかりの聖人・福者には、日本26聖人（1862年に列聖）、日本205福者（1867年に列福）、トマス西と15殉教者（1987年に列聖）がいますが、いずれの列聖式、列福式も日本以外の地で行われました。

したがって、日本のカトリック教会が主導して準備を進め、列福式を日本で行うのは今回が初めてです。

（3）新福者について

今回、教皇が列福を承認した「ペトロ岐部と187殉教者」は、徳川幕府の厳しい禁教政策のもとで信仰の自由を守りぬき、1603～1639年に全国各地で殉教した日本人の男女信徒・修道者・司祭です。

ペトロ岐部像（舟越保武　作）
ペトロ・カスイ岐部神父記念公園（大分県国東市）

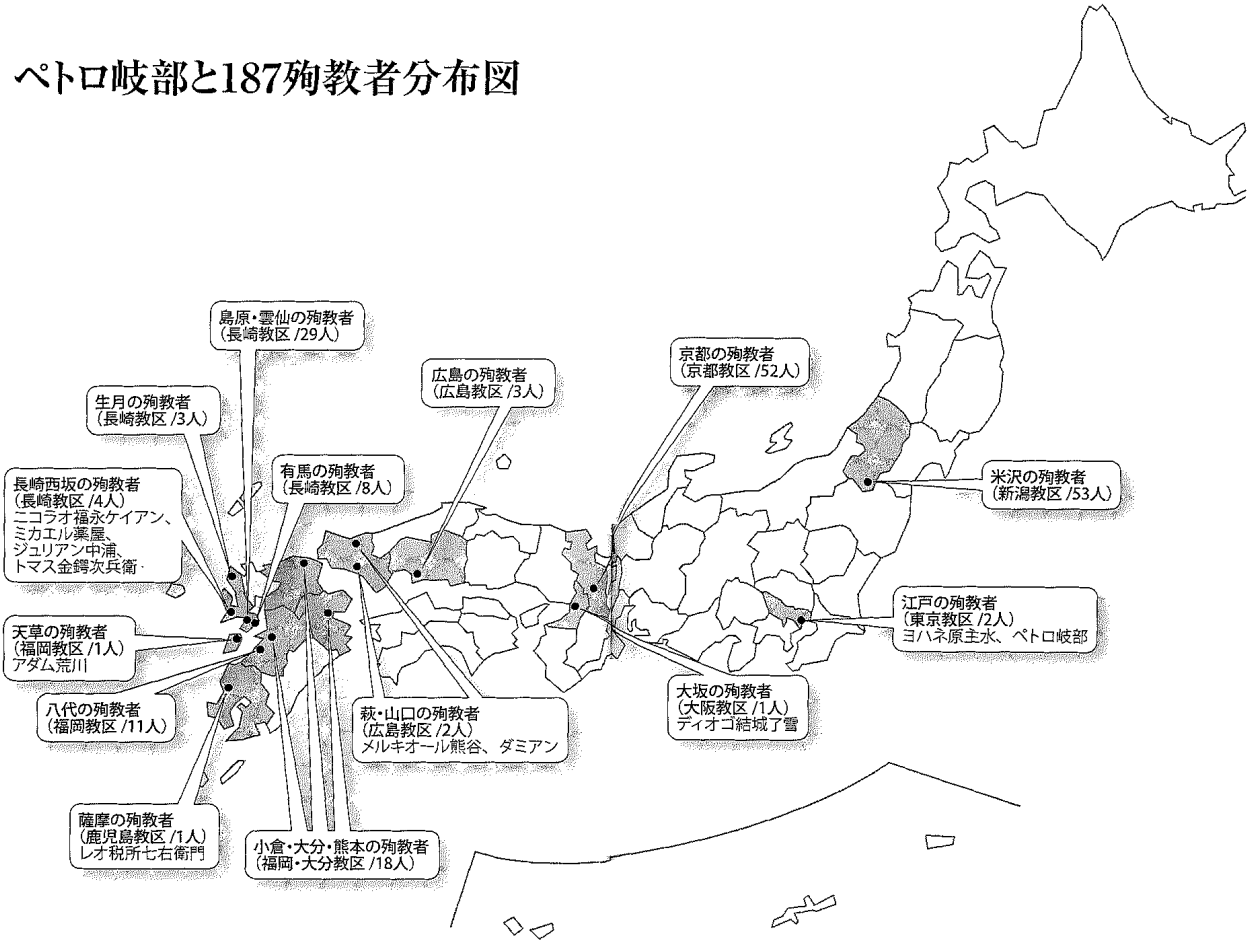
188殉教者の筆頭にあげられているペトロ岐部（1587年　豊後《現大分県国東市》生まれ、1639年　江戸で殉教）は、迫害に苦しむ日本の信徒たちのために司祭になることを決意し、大陸を横断し徒歩でローマへ行った不屈の人です。

中浦ジュリアン（1568年《現 長崎県西海市生まれ》、1633年《現 長崎市西坂で殉教》）は、天正の遣欧使節の一人としてヨーロッパと日本を結ぶ懸け橋の草分けとして広く知られています。

上記を含む５人の司祭･修道者以外の183人の殉教者は、武士・町人・家庭の主婦・伝道士など老若男女の信徒たちです。一家揃って殉教した家族、当時は下男下女と呼ばれ名前も年齢も不詳の奉公人、身体に不自由があるため社会の底辺で苦しんだ人々など、さまざまな生涯を送った人々が含まれています。

中浦ジュリアン像
カトリック島原教会（島原市）

ペトロ岐部と187殉教者分布図



「ペトロ岐部と187殉教者」一覧

		主な殉教者		殉教年月日	殉教地
1．八代	11人	ヨハネ南五郎左衛門 シモン竹田五兵衛 ヨアキム渡辺次郎左衛門 ミカエル三石彦右衛門	他４人 他３人	1603.12. 8 1603.12. 9 1606. 8.16 1609. 2. 4	熊本 八代 〃 〃
2．萩・山口	２人	メルキオール熊谷豊前守元直 ダミアン		1605. 8.16 1605. 8.19	萩 山口
3．薩摩	１人	レオ税所七右衛門		1608.11.17	川内平佐
4．生月	３人	ガスパル西玄可	他２人	1609. 1.14	生月
5．有馬	８人	アドリアノ高橋主水	他７人	1613.10. 7	有馬
6．天草	１人	アダム荒川		1614. 6. 5	富岡
7．京都	52人	ヨハネ橋本太兵衛	他51人	1619.10. 6	京都
8．小倉・熊本・大分	18人	ディエゴ加賀山隼人 バルタザル加賀山半左衛門 小笠原玄也	他１人 他14人	1619.10.15 1619.10.15 1636. 1.30	小倉 豊後日出 熊本
9．江戸	２人	ヨハネ原主水 ペトロ岐部かすい（司祭）		1623.12. 4 1639. 7	江戸
10．広島	３人	フランシスコ遠山甚太郎 マチアス庄原市左衛門 ヨアキム九郎右衛門		1624. 2.16 1624. 2.17 1624. 3. 8	広島
11．島原・雲仙	29人	バルタザル内堀 パウロ内堀作右衛門 ヨアキム峰助太夫	他２人 他15人 他９人	1627. 2.21 1627. 2.28 1627. 5.17	島原 雲仙 〃
12．米沢	53人	ルイス甘糟右衛門	他52人	1629. 1.12	米沢
13．長崎	４人	ミカエル薬屋 ニコラオ福永ケイアン ジュリアン中浦（司祭） トマス金鍔次兵衛（司祭）		1633. 7.28 1633. 7.31 1633.10.21 1637.11. 6	長崎西坂
14．大坂	１人	ディオゴ結城了雪（司祭）		1636. 2.25	大坂

3．殉教者たちからのメッセージ

今回福者と認められた人々が生きていた当時、殉教者のことをポルトガル語を使ってマルチル（証人の意味）と呼んでいました。

では、今回、クローズアップされた188名の殉教者（証人）たちが己の命をもって証明したことは何だったのでしょうか。

読者のみなさまの中には、何ら抵抗することもなく死んでいった彼らの姿を見て、「なんとなく弱々しい」という印象をもたれる方もおられるかと思います。

確かに、「マルチル」とは、「武器を手にせず（抵抗せず）、キリストの名において、命を落とした」者のことを言いますが、彼らは武器を手に取ることはおろか、時の権力者をはじめとする迫害者に対して恨みごとを吐くわけでもなく、仲間たちに向かって声高に復讐を訴えかけたわけでもありません。

しかし、そこには、わが身を切り刻まれ、捨て去ることを通して、敵・味方、迫害・被迫害の対立軸を克服する姿を見ることができ

ます。

彼らは迫害者と真正面から向かい合い、見るも無残な姿に変わり果てることによって、「敵対と報復の連鎖を乗り越えよ」という強烈なメッセージを発信しているのではないかと考えます。

つまり、殉教とは、己の命をもってする究極の平和の証といえるでしょう。

ところで、現代の日本においては戦争や江戸時代の禁教令下の迫害といったことはありませんが、経済至上主義のもとで競争にうまく乗じた「勝ち組」とそうでない「負け組」とに分かれ、それにともなうひずみが随所に表れています。人間性はゆがめられ、人間相互間の不信の溝は大きくなって、多くの人々が孤独感・疎外感にさいなまれています。

その挙句、最も基本的で重要な家族の絆さえもが破壊されてしまっている事態が日常化しています。家族同士が殺人の加害者、被害者となり、無差別に「だれでもよかった」という理由にならない理由で人命が奪われるニュースはあとを絶ちません。

最も尊く、大切な‘いのち’が軽視されています。

さて、私事でいささか恐縮ですが、去る9月、かつての外国人居留地であった長崎市大浦町を中心に開催された「2008長崎居留地まつり」（長崎居留地まつり実行委員会主催）に参加する機会がありました。同「まつり」では多くの趣向を凝らした催し物が行われましたが、そのうち、地元の公立小学校のこどもたちによる合唱が披露され、演奏会場となった老舗ちゃんぽん店の前に集まった観衆から惜しみない拍手が送られていました。

さて、そのこどもたちが歌った曲の中に、『いのち』というタイトルの歌があり、印象に残ったので、歌詞の一部を紹介したいと思います。

『いのち』

いのちがこんなにとうといのは　この世にたったひとつだから
いのちがこんなにきれいなのは　かみさまがこころこめてるから
いのちがこんなにいとしいのは　それはあなたのいのちだから
とうさんがいて　かあさんがいて　かぞくがいて　みんながいて
そして　あなたがうまれた　けっしてひとりではなかった

作詞・作曲　シスター古木（カトリック修道会「宮崎カリタス修道女会」所属）

こどもたちの歌声は、「とうとい」、「きれいな」、「いとしい」はずの‘いのち’そのものが粗末にされ、「けっしてひとりではなかった」はずの‘存在’が疎外されている現状を訴えかけているように思えました。

殉教者たちの生き方は、人間として自由に信じる権利を最期まで行使しつつ、憎しみや恨みを抱かず、自身の‘いのち’を葬ることによって、抑圧や暴力の愚かさを、ひいてはたいせつな‘いのち’の価値を証明しているといえるでしょう。

4.「長崎の教会群とキリスト教関連遺産」との関連について

2007年１月、「長崎の教会群とキリスト教関連遺産」が正式にユネスコの『世界遺産暫定一覧表』に登録されたことを受けて、長崎のキリシタンの歴史に対して関心が高まっています。

長崎県が作成した『世界遺産暫定一覧表追加資産に係る提案書』によると、長崎の教会群とその関連遺産は「世界史に類を見ない長期の潜伏からの劇的な復活という歴史性を背景にして、抑圧からの解放と教会への復帰の喜びという崇高な精神性を象徴している」と言及されています。

日本のカトリック教会は、歴史的にも、神学的にも殉教者によって流された血のうえに立てられたといっても過言ではありません。殉教者のこころや生き方に対する深い共感なしに、日本の教会のアイデンティティーを理解するのは困難でしょう。

今回新たに福者と認められたペトロ岐部と187名の殉教者たちは、徳川幕府初期のキリシタン禁教時代を生きた人々であり、現代の日本のカトリック教会の礎(いしずえ)となっています。

上記『提案書』は教会群について、「信徒たちが弾圧を避けて潜伏し、連綿として信仰を継承し、貧しい暮らしにもかかわらず自らの財産と労力を捧げ、信仰の証として造り上げられた」と指摘しています。

信徒たちの信仰の証は、福者たちの証を受け継ぐものであり、その土台の上に小さくも美しく結晶したのが教会群といえるでしょう。

5. おわりに

『列福式』自体はひとつの宗教儀式に過ぎないのですが、この式典が、互いに信じることの自由を認め、受け入れ、尊重し合うことを考えるきっかけになってくれたらと思います。信仰・思想・信条の自由を認めることは、その人の‘存在’、つまり、‘いのち’を尊重することにつながります。

また、「長崎の教会群とキリスト教関連遺産」についても改めて考える契機となれば幸いです。